



生化学の面白さを伝えるには

新年度が始まり、新しい学生が大学、大学院に入ってきました。本会員の方々の中には、講義を担当される方が多数いらっしゃると思います。私の担当する生化学に関係する講義も始まりました。講義を通して、生化学の面白さをなるべく伝えたいと思い、毎年思考錯誤しております。将来研究者になる学生に対してはもちろん、研究者以外の道に進む大多数の学生に対しても、生化学への理解と興味を持ってもらうことは大切なことでしょう。自分がかつて学生だったころ、講義に積極的に参加していたかを自問すると、かなり疑問があるのは敢えて脇に置いて、今の学生の皆さんに何かきっかけをつかむ手助けができたらいなと思っています。実際どの程度できているかは、はなはだ自信のないところではありますが、うまくいっていないことを含めて自分の経験談をいくつか書いてみようと思います。

ここ数年は、出席の確認を兼ねて、毎回の講義の最後に、小テストと講義の感想と要望を学生に書いてもらうようにしています。これは、多少手間はかかりますが、独りよがりな一方的な講義になってしまうことを減らす手助けになっています。えらく上から目線で評価してくる学生からのコメントもけっこうあり、最初は面食らった感じでしたが、これが最近のアンケート慣れた学生の気質の一面だと理解しています。特に何も無いという無反応なコメントもかなりの割合になります。嬉しいコメントは、講義内

容について、面白さが伝わり、ぜひ自分も生化学に関わる研究をやってみたいというようなものです。このようなコメントを心の拠り所にする一方で、どうすれば残りの学生に伝えることができるのかを考えさせられます。

では、学生に話がよく伝わり、興味を持って聞いてくれるのはどんな時でしょうか。このような時は、話す方が楽しんで話すことができていることが多いように思います。関連する自分の過去の経験談を加えたり、時事ネタを紹介したり、応用への希望的観測を説明に加えることで、身近に感じてもらえるとともに面白いと思ってもらえることが多いように思います。うまく関連付けることができる場合には、ノーベル賞の成果などは、よく追加説明に使わせてもらっています。逆に、学生に話が伝わらない時は、説明者である自分の理解が薄っぺらな場合が多いように思います。理解が浅いと、追加で説明する自信がもてず、関連する具体例にも実感がともなわず、教科書や論文に書かれていることだけを、ただただ説明することに終始してしまいます。このような状況では、面白い話をするなどできないでしょう。つまり、説明者が予めよくよく理解し、関連事項もしっかり調べて準備しておくことが大切だと感じています。

結局は、講義をする前に十分に準備をして望むという当たり前のことが大切ということになるかと思います。このようなことは、我々研究者にとっては、好きな研究を進める楽しくかつ重要な時間を削って行うことになり、義務的に思ってしまうと辛いものになってしまいます。そこを敢えて未来の生化学の発展への貢献と考え、楽しんでやると腹をくくることで、少しは準備が進むことに繋がるのではないのでしょうか。今年度、生化学を面白いと思ってくれる学生が少しでも増えてくれることを切に願っています。

(Gaspard)